

戦後

日本に残った李さん、劉さんらは、戦後も苦難が続いていた。まず、横浜裁判の証人として野刑務所に入れられた。罪人でないのに、初めは自由に外出もできず、何かあるとMPが警棒で殴ったという。

二十一年八月、二人とも中国大使館の衛兵となった。ここでも待遇は悪く、無給、食パン二枚と漬け物の食事。当時の国民党政府は、花岡事件を理解しようとはなかった。同国人からの冷遇、差別に二人の心は痛んだ。



李さん 裁判で河野所長とか補導員、わたしたちの顔、見ようとしらないの。刑務所にいた時、ご飯余ったの独房の河野所長にやったこと二、三回あるよ。おなかすくことつらいの、わたし一番よく知ってるからね。看守に怒られたよ。やっちゃだめって。

劉さん 判決の日、清水とか福田とかの補導員や寮長、終身刑とか重労働二十年を言い渡され、ていすから立ち上がれずにいた。がっくりしてね。こんなに弱い人が、一人で何十人も中国人

を殺してきたのかと思つたよ。

二十三年、李さんは日本で結婚した夫人を連れて帰国した。内乱で汽車も車もなく、故郷の河北省まで行くことは不可能だった。あきらめて日本に戻った。知り合いの中国人から資金を借り、東京でバチンコ店、料理店と手がけ、横浜に移るなど苦勞を重ねた。が、結局、失敗。三十二年、劉さんが住んでいる札幌に移り住んだ。

裁判の間、新宿の中華料理店につとめた劉さんは、その主人に認められ、十二万円を借りて札幌で小さな店を始めた。二十一年十月のこと。これが順調に行つた。終戦当時、日本人はどの人もオニミたいに見えたのに、仕事を通じて友人ができると教養ある立派な人も多いのだと驚いたという。

札幌にはもう一人の花岡事件の生存者、林樹森さんがいたが、四十八年九月、病苦から自殺した。苦勞の末、やっと一息つき、二十八年ぶりに中国に帰る予定だった。三人とも戦後数回、遺骨発掘運動などに参加して花岡を訪れている。

その花岡では、事件を伝えようという運動がある一方、中山寮跡はダムの底に沈められている。劉さん、李さんは「わざと沈めたに違いない」と思っている。

証言(上)

昭和五十年夏、あの日から三十年の歳月が過ぎた。日本は平和になった、という。これまで登場した人たちに、花岡事件とは、戦争とは、戦後三十年とは何であったのかを聞いた。

李振平さん 自分がよく生きとるなと思うですね。あの人たちが反省したの、いつまでも反感持たない。夢見たことある。中山寮の補導員につかまりそうで、逃げるけど足が動かない。うなされて、目が覚めたです。

四十七年の国交回復で自分の気持ちパッと開放した。うれしかったよ本当に。今は、日本の友だち大勢いるし、事業を応援してくれる人もいる。去年赤字で苦しんで、あの時代死んどけば、こんな苦しい日遭わなかったと少し思つたよ。

劉智渠さん 生き残っているし、国(中国)も独立した。もし侵略戦争がなければ、日本軍部が反面教師にならないで、まだ(中国は)半植民地だったでしょう。過去のこと苦しい経験があったから、かえって生きている味あつたような気がする。人生あれでいいじゃないかとね。

でも、当時のこと思い出すと、何故連中は人間味がなかったかと思えますよ。よくあんなことができた。いまはただあきれて、笑うだけです。僕らの精神をドン考えたか。今はもう、みんな反省しているでしょ。

伊勢智得さん 悪夢だな。何も知らずに……。思い出したくない。忘れたい。もう私は……。 (拘留所から) 帰ってきた当時(注)は、よく、夜中に目が覚めて、こう壁を探った。鉄格子じゃないかと思って……。。

三浦太一郎さん 今の生活には何も言うことはないです。いろいろみなさんに親切にもらって命を長らえています。巢鴨でも慰問に来てもらったもんです。死んだ四百二十人、これは気の毒だった。河野さん(河野正敏鹿島組花岡出張所長)が鹿島建設の重役になっているのは当然です。会社はあの人の無期刑に一切の責任を負わしたんだから。

清水正夫さん(元中山寮補導員) 水に流して、思い出さんことにしている。もう思い出したくない。うん。自分のやったこと覚えているから……。

〔注〕横浜裁判で絞首刑から重労働二十年の判決を受けた六人は、二十九年から三十一年にかけ

て相次いで出所した。

証言(下)

遺骨発掘運動をしてきた佐藤和喜治さん

今の日本は、花岡の仏さんに、本当に安らかに眠ってくださいと自信を持っていえるところまできていない。私は学徒出陣の幹部候補生として特攻訓練を受けた。平和のために行動するのは、生き残ったものつとめだと思う。

中国人殉難者名簿を作った赤津益造さん

花岡事件だけを特殊な事件として扱ってはいけない。侵略戦争が何であったのか、民族的な反省の上にたって日中の人民が真の友好を進めなければならない。現在の覇権問題も、日中共同声明から一步も後退させてはいけない。

「無人の村」で花岡事件をうたった詩人・押切順三さん

陸軍の一兵卒で中国戦線に行き、戦争を反面教師として権力とか国家の姿、メカニズムをおぼ

ろげながら知った。戦後の私は、つねに反戦と反省を胸に暮してきた。

日中不再戦友好碑を守る会会長・武田武雄さん
個人個人でなく、戦争そのものが悪かった。毛沢東、周恩来など現在の中国の指導者は信頼できると、覇権問題も当然と思う。主義主張はともかく、中国とは本当に友好を深めるべきだ。

遺骨発掘運動をした遠藤正広さん
聖地として残すべき大穴や中山寮跡はダムに埋まった。日中友好平和運動のために申し訳ないと思う。七ツ館坑の生き埋め死者は、いまだに地底に眠っている。つくづく資本主義というのはむごいと思い知らされる。

日中友好協会正統本部大館支部・佐藤博信さん

十二歳の時見た共楽館の現場が目に残っている。人間の尊厳を、根底からくつがえされたという感じだった。三年前、中国に行った時、国境を越えて中国領に入ったとたんなぜか涙がこぼれて仕方がなかった。この事件を教訓に、人民レベルでの友好が発展しなければ本物の日中友好は育たない。それを私の一生の仕事としたい。

「花岡事件の人たち」を書いたルポライター・野添憲治さん

太平洋戦争当時の日本人の体質は今でも全然変わっていない。花岡のような状況が再現すれば、ぼくたち日本人は、形は変わっても同じようなことをやりかねない危険があると思う。

資料

花岡事件に関する資料は多い。今度の取材で、参考にさせてもらった資料の中から、主なものを紹介する。

▽野添憲治著「花岡事件の人たち——中国人強制連行の記録」(評論社、昭和50) 劉さん、李さん、林さんの三人の聞き書きを中心に、事件の過程をたどっている。戦後、中山寮で診療に当たり、事件をもっと早く社会に訴えた高橋実医師の報告もある。

▽平岡正明編著「中国人は日本で何をされたか」(潮出版社、昭和48) 花岡事件など、全国六カ所で起きた中国人虐待事件を報告、全国百三十五事業所での事件の全容を浮かび上がらせている。

▽石飛仁著「中国人強制連行の記録」(太平出版社、昭和48) 花岡事件を中心に、豊富な証言で中国人の連行から戦後までの背景を追っている。中国戦線で戦った人の証言も多数。

▽赤津益造著「花岡暴動」(三省堂新書、昭和48) 日中友好の立場から花岡事件の持つ意味を
探っている。暴動後、中国人を抑えるためのスパイが中山寮に送られた話も紹介している。

▽松田解子著「地底の人々」(民衆社、昭和47) 七ツ館事件から六月三十日の蜂起に至るまで
の小説。当時の鉱山の様子が手に取るようにわかる。

▽洛沢著「花岡川の嵐」(潮出版社、昭和47) 花岡事件生き残りの人が中国に帰ってから書いた
小説本の訳本。多少英雄的に脚色してある。

以上は、現在でも本屋で手に入る。品切れ、絶版となっているのは次の通りである。

▽劉智渠口述「花岡事件——日本に俘虜となった一中国人の回想記」(中国人俘虜犠牲者善後
委員会、昭和26)▽日中友好協会編「花岡ものがたり」(昭和26)▽中国人強制連行事件資料編
集委員会編「草の墓標——中国人強制連行事件の記録」(新日本出版社、昭和39)など。このう
ち、版画入りの「花岡ものがたり」は四十六年復刻版が出た。滝平二郎氏らの版画と詩の形をし
た文章は迫力がある。(問い合わせ先、大館桂高・奥山昭五教諭)

雑誌では▽世界編集部編「戦時中における中国人強制連行の記録」(岩波書店「世界」35年5月
号)が豊富な資料を駆使して詳細に報告している。また、中国人殉難者名簿共同作成実行委員会
の手になる「中国殉難者遺骨送還状況」「中国人強制連行殉難状況」など四編は日中友好協会正
統本部事務局、政法大学付属図書館などに保存されている。一般に引用される花岡事件の死者の
数などは、すべてこの資料に基づいている。

取材を終えて

花岡や周辺を歩きながら、何回も重苦しい沈黙に出会った。共楽館前の老女は「なあんも知ら
ん」と口をつぐみ、芦田子で訪ねた人は「花岡事件のことで……」と切り出したとたん、顔色
を変えて「さあね、聞いたこともねえスな」とうつむいた。別な人に確かめると、その人の主人
こそ、獅子ヶ森にたてこもった中国人狩りに、大活躍した人だという。

元中山寮寮長代理の伊勢さんは玄関のあたりがまちに座り込んで、話すというより、むしろ黙
り込んでいた姿が痛ましかった。空間の一点を見つめて、動かない視線、深い井戸の底から一個
一個拾い上げるように話す言葉。それは、共楽館の拷問や、花岡川改修工事の惨状を話してくれ
た、他のどんな人の話よりずっと雄弁に事件の異常さを教えてくれた。

札幌で会った劉智渠さん、李振平さんも口は重かった。被害者なのだから、積極的に話してく
れるだろうという期待は、「もう話したくないです」という劉さんのひとことで打ち砕かれた。李
さんも同じで、特に興奮した口ぶりになっても、すぐにもとの温和な顔に戻った。

そんな劉さんの話を聞いていて、不意に床に手をつけて謝らなければならないという気になっ

た。どうしてそんな気になったのか。日本人が犯した誤ちだから、自分にも責任があると感じたのか。今考えてもよくわからない。

三十年の間、人々は時間の壁を幾重にも塗り込めて、記憶を消そうとしてきた。が、そうすればするほど、事件はしつこくよみがえり、それが人々を沈黙させた。いま、日本は平和になったという。しかし、佐藤栄作元首相にノーベル平和賞をもたらしたのが、鹿島守之助氏の働きかけによるものだったという話を聞くと、平和ということばに、改めて考え込んでしまう。

中山寮跡を埋めつくした鉱さいダム。それを見下ろす日中不再戦友好碑を訪れた時、白い大理石の碑の上に、十センチほどの白い骨がのっていた。もし口がきけたら、あの骨は、何を、どんなふうに話したのだろうか。

補遺

下関から花岡まで、劉さんたちが丸四日間汽車に乗りづめだったという記事（「強制連行」）に読者から電話が来た。花岡線と本線はレール幅が違い、大館駅で乗り変えたはずだ、という。当

時、大館駅機関区で働いていた元大館市議、工藤良一さん（四八）に話を聞いた――。
いつごろでしたか、昭和十九年八月と思います。貨物でなく、おんぼろな客車で来て、みんなボロボロの服を着てました。憲兵がついて、そばには近よらせなかった。物珍しいので、機関区の仲間みんな、車庫のかげから見えました。汚ない真黒な毛布に包んだものを運んでいましたが、ありゃ恐らく死体でしょう。棍棒を持ったのが引き立てていて、ゾロゾロ、駅の西側から線路沿いに小坂鉄道の方に歩いて行きました。惨めな感じだね。私たちは俘虜団だとききました。